

2021年 5月30日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「種のはなし」 マタイによる福音書 13章31-35節 高橋彰

◆「からし種」と「パン種」のたとえ

1331 イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、32 どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」33 また、別のたとえをお話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」

◆たとえを用いて語る

34 イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった。35 それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「わたしは口を開いてたとえを用い、
天地創造の時から隠されていたことを告げる。」

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

イエスが「たとえ話」を用いてガリラヤの民衆に神の国の到来とその教えを語ったことは、とても重要な、そしてイエスという方とその教えを知るための多くのヒントがそこにあるとして、近年特に注目されて探求されている分野の一つです。イエスの「たとえ話」はシンプルでありながら聞く者たちの心に深く記憶され、心を揺さぶるようにして問いを与えられ、知恵を呼び覚まし、想像力を発揮させる力を持っています。時代や場所を越えて、現代のわたしたちにまでもそれが響いてきます。

「譬え」(マーシャル)はユダヤの伝統でもラビ(律法の教師)たちやユダヤ社会での知恵の教育に用いられた方法でしたが、イエスの「譬え」は内容としても、題材や、指し示されようとしているものについても、聞く人びとが驚くような斬新さがありました。またイエスの時代、紀元1世紀のパレスチナから地中海の東沿岸の地域はヘレニズムというギリシア文化や支配の影響を受けた多くの民族が混在し、共存していました。新約聖書がギリシア語で書かれているのは、その多様な人びとに伝えられる共通の言葉でもあったからです。ギリシア語の「譬え」(パラボレー)は人びとの知恵や教えの伝統を持つもので、富や貧困、命や死、死後の運命などについてたとえや例話を用いて語り伝えられています。イエスのたとえ話は、こうしたユダヤの文化とヘレニズムの文化の双方に影響を受けながら、題材が用いられ、話が聞かれ、伝え継がれてきているのがわかります。多様な言葉や生活習慣を持つ人びとが混在していた社会においては、短くてシンプルでリアリティがある、そして答えを狭めずに聞く人の想像力を働せられる「たとえ話」は共有され、広められるのにとても有効だったのだとわかります。イエスが生きられた時代、イエスの譬えを最初に聞いたガリラヤの群衆たちの生活環境、そしてイエスの弟子たちから初代の教会の信徒たち(それはユダヤ人キリスト者たちからギリシア語を話す人びとへ、さらに異邦人へと広がっていきました)の状況を、福音書に記されたたとえ話から見出そうともされています。

イエスの譬えは、そうした背景の日常生活をよく表した題材が用いられましたが、話の展開が独創的で、意外性や驚き、時には残酷さもあり、聞く人びとに強い印象を与えました。そして目には見えない天の国、神の支配について思いを向けさせ、神の国の到来に希望を与えると同時に、人びとに自分たちが置かれている社会の

矛盾や不義の現実にも気づかせ、それに抗う意思や知恵をも与えたのでした。「たとえ話」は、一方的に教え聞かされるものでなく、聞く者に理解や対話、応答も促されます。イエスはそのようにして、対話的に問いを投げかけて人びとの心に迫りました。イエスの教えは聞く者との関係において力を発揮され、展開されます。イエスの宣教は口(一方的に語る)だけでなく耳(聞くこと)も働かされていたのです。天の国の告知は、聞く者たち一人一人に傍観しているのではなく応答をさせて立ち帰らせ、そして自分たちの生きている社会の変革をも生じさせるのです。だからこそ、イエスの教えを聞いた人びとにさまざまな応答が生じ、中には自分たちの存在や地位を脅かす危険を察知した者たちによって反発され、殺意を抱かれ、十字架へと追いやられたのです。それでも、この「たとえを用いて語られるイエス」とその解説は、イエスの宣教の熱意をも伝えます。聞く者も拒絶する者もいる、種(み言葉)は世の諸力に覆い塞がれてしまっているようにさえ見える、しかしそれでも種は蒔き続ける。そして一粒の種が発揮する成長はなんと驚くような実りをもたらす。世に蒔かれたように広まった、イエス・キリストを信じる者たちの集まりである教会と信徒たち一人一人がいます。一つ一つは「からし種」のように小さい。そして蒔かれた種は蒔き、焼かれ、苦闘し、奪い去られ、覆い塞がれているかのようです。それでも一粒の種が地に蒔かれたことによって芽生え育つものは、その種をただ見ているだけではとても想像できないほど豊かで、自らもその周囲にも影響を与えます。神の国の到来は大きな希望をわたしたちに与えます。からし種は雑木で、一気に育ち、周囲にはびこり、そして枯れてゆきます。パン種のたとえは女性が題材にされ、からし種と対になっています。男女の比喩を並べている点も、当時の習慣や話法からは珍しい特徴だと言われます。主イエスの弟子たち、そして教会も世にあってそのように、思いがけぬ力によって成長し、驚くように広がって、生きています。世の力がいくら取り除こう、根絶させようとしてもまたたく間にまた生える雑木や、パン種として。それはどんなに人びとが拒絶しようとも失われません。この世界に命をもたらし、天の国への扉を開いて招き続ける神の意志が、わたしたちにはたらき続けているからです。